

千住鎮雄・伏見多美雄 著

経済性工学の基礎

日本能率協会 定価 2600円

本書は、関係者の間で広く読まれてきた『経済性工学』の改訂版である。今回の改訂に当って、入門編にあたる本書と、応用編にあたる続刊『経済性工学の応用』との2分冊になった。

このことは、内容がより充実し、量的にも増えたための措置だが、同時に、両者の性格をよりいっそう明確に区別し、それぞれを相異なる読者層にも受け入れられるようにした点で好ましい措置と思われる。

本書は以下の8章から構成されている。

(1) 現状の展望と問題提示では、経済性工学の位置づけと、現状において多く見られる問題点を指摘している。

(2) 経済性の比較の原則では、(i)比較対象の明確化、(ii)相違する費用と収益をとらえることの2原則をあげ、割勘計算と損得計算のちがひ、可変的費用・収益のとらえ方等についてわかりやすい例を引いて説明している。

(3) 比較の原則の応用では、状況に応じた損得の判定が必要なことを述べ、(i)埋没費用の考え方、(ii)固定的費用を割り掛けることへの注意、(iii)手余り状態と手不足状態による差等、代表的な問題への応用を述べている。

(4) 投資案の評価と資金の時間的価値では、資金の時間的価値換算の考え方と計算手法を述べているが、ここでも単なる式展開ではなく、その考え方をわかりやすく解説している。

(5) 条件に応じた判断指標では、各代替案の相互関係を、独立案・排反案・混合案に分け、それぞれに対する選択指標を示している。特に排反案に対して示された追加利益率法(資源を1単位追加することによる利益の増分に注目した選択法)は、本書の中心の1つであり、応用範囲も広くかつ奥も深い。

(6) 複数投資案の比較と選択では、時間換算の手法と、条件に応じた判断指標とをともに、設備投資案の経済性を検討し、最適案を選ぶための考え方を述べている。

(7) 物価変動を考慮した投資分析では、まず価格変動には、いわゆる物価変動と、個別価格の変動との2種類があることを指摘したうえで、デフレートの仕事と投資分析への応用について数値例を中心に解説している。

(8) 不確実な見通しのもとでの分析と決定では、感度分析、優劣分岐点と優劣分岐線、さらに予測がはずれた場合の安全性の比較等について具体的な例をあげて説明している。特に、実践の立場でどのように対処すべきかを整理している点は、実務にたずさわる読者への配慮と言えよう。

全体を通じて、文章は明解で、図表による説明も当を得ている。分析結果を目に見える形にまとめることにも力点が置かれており、そのための工夫も随所に示されている。

本書のきわだった特徴の1つは、著者の深い学識と豊富な教育経験により、具体的な事例をあげて、事態の本質をわかりやすく説明している点にある。手余り状態と手不足状態との差を説明した“そば屋”と“まんじゅう屋”の例、独立案と排反案を説明した“浦島太郎”の話など軽妙で印象的な例も数多い。

経済性分析の実施に当っては、複雑な現象の中からその本質を見抜き、その場に適した分析手法を選ぶことがまず必要とされる。そのためにも、多くの事例に接しておくことが有益である。本書は豊富な事例を通じて、読者のそうした期待にも十分に応えてくれる。

また演習問題が豊富に準備されているのも本書の特徴の1つである。個々の問題は、状況設定がきわめて具体的であり臨場感に富んでいる。その点、ビジネス・スクール、セミナー等における研修用テキストとしての性格も備えている。

これら演習問題の選択も含めて、読者に使い方の指針が与えられている点も親切な配慮である。とかく、なおざりにされがちな読者からの反応を、豊富な経験によって十分に汲み取り、血の通った説明になっていることは特筆すべき点であろう。本文中に引かれるすべての事例は、洗練されていて、しかも無駄がない。

いずれにしても本書は、実務家にも役立つよう十分配慮されており、同時に大学でのテキストとしても最適である。

(天野明夫 早稲田大学)